

日本手話の関係節

マーク・ペナー、矢野羽衣子、寺澤英弥
(日本ろう福音協会)

要旨

本発表では、発表者ら（1人は聴者、2人は親がろう者であるろう者）は談話／類型論の観点から、自然な日本手話のビデオを、全部で25分間の4つのテキストについて分析し、通常の手話言語使用において関係節がどのように処理されているかを明らかにする。初めに、関係節を主要部名詞または代名詞（明示もしくは暗示されているもの）を修飾し、その指示対象を細かく限定するかまたはより詳しく描写する埋め込まれた節と定義する。この定義に基づいて、コーパスの動詞を、独立節の主動詞であるか、従属節であるか、従属節の場合付加節か、補文か、関係節かを調べた。さらに、その小さなコーパスの中で31の関係節であったものについて詳細を調査した。

その結果、日本手話の関係節は、現在までに研究が進んでいる手話言語の関係節の中で他にない性質を持っていることがわかった。第一に、関係節の機能をもたらす3つの別々の構造のはっきりとした例が見られる。1つ目は主要部名詞を決める動詞が主要部名詞に先行している。2つ目では動詞が主要部名詞に後続している。3つ目の構造では主要部名詞には全く触れられず暗示されるのみである。第二に、ほとんどの文献が参照可能な手話言語と同様に、関係節は開始点や他の前部要素と重なるトピック位置に制限されないことがわかった。いくつかの例では、トピックマーカの非手指標識が関係節と主要部名詞と同時に現れることがあるが、これは義務的ではない。最後に、主要部名詞もしくはそのトークンは、様々な文法的な働きをしている。我々のデータでは、関係節は主文の中で、主動詞の主語、目的語、間接目的語として機能する名詞を限定するだけではない。関係節の中の主要部名詞もしくはそのトークンとしての機能自体が、主語や目的語として機能しうるのである。